「内なるキリストに生かされて　～初代教会の証し～」　　　　　　　　小川洋　（ロンドンJRC）

　紀元30数年ごろ、エルサレム近くで復活の主キリストが昇天された。代わって聖霊なる神が、キリスト者の集まりに降り、初代キリスト教会が始動する。この出来事を節目に、それまで事あるごとに拙さを露呈していた使徒たちは、文字通り新たな息を吹き込まれ、キリストの証し人として目覚ましい福音伝道の働きを始めた。彼らの福音の宣教により、キリスト者になるものが日に数千人にも及ぶこともあり、キリスト教会は急激に大きくなった。と同時に、使徒たちに対するユダヤ教とその社会からの迫害が強まる。

　信徒たちが増える中、キリスト教会内で使徒たちを補佐する7人の働き人たちが選ばれた。そのうちの一人がステファノである。語る賜物も持ち合わせているステファノの目覚ましい働きを疎んだ者たちの策略により、彼はユダヤの神を冒涜し人心を惑わしているという偽りの訴えで、ユダヤ教最高法院の法廷に引き出されてしまう。その法廷での弁明が、使徒言行録7章に書かれたステファノの説教。聖書に記された彼の最初で最後の説教。

　このステファノの説教は、良くまとまって分かり易く、また神学的にも優れていると言われる。しかし、ステファノが語ることをこれ以上許されていたなら、必ず語られていたはずの最も重要な要点は語られることはなかった。なぜなら、彼が説教（弁明）聴いていた人々から暴行を受けて殺害されてしまったから。　キリスト信仰の要点、つまり救い主イエス・キリストの来臨（クリスマス）と、その御生涯中の御言葉と御業、そして十字架と復活について語る前に、ステファノは絶命してしまった。

　けれども、彼の説教の最後の言葉から、次にどのように説教が続くかは、福音に精通したキリスト者ならだれでも容易に想像できるし、それを補うこともできるはず。実際に、このステファノの殉教のあと、残された使徒たちとキリスト教会は、福音を俊敏かつ効果的に地中海世界全土に宣べ伝え、それは、今日にまで休むことなく続く全世界伝道の礎となったのだ。

　ステファノは、創世記12章のアブラハム物語から語り始める。そして次に、族長たちに続くヨセフ、モーセ、ダビデとソロモンと語しを繋げていく。聖書に親しむ教育をされているユダヤ人にとっては、子供の頃から馴染みのある信仰の英雄たちばかり。しかし、その根底には何よりも、神様の、目を覆うような人の罪に対する忍耐と、その罪人に対する驚くべき恵みのご計画とがあることを、ステファノは明確に伝えた。たとえ、主のクリスマスと十字架と復活が欠いてしまっても、彼の明晰な言葉は、ユダヤ教の罪を突き付ける説教として十分な力を持っていた。ゆえに、ステファノは殺害され、エルサレムのキリスト教会に大迫害が始まった。　そして、使徒の中からもヨハネの兄弟ヤコブが最初の殉教者となった。

　けれども、迫害によって、殉教の血が無駄に流されるどころか、かえってキリスト教会はその信仰の確信を強められた。ここにパウロ（サウロ）が登場する。キリスト者たちを殺そうと意気込んで、ステファノの殺害にも立ち会っていたサウロは、幻の中で主イエスと決定的な出会いをし、見事に回心し主の僕（しもべ）となる。その後、パウロはキリスト教会から、バルナバと共に地中海世界の宣教へと派遣される。ステファノが殉教してから十数年後のことである。その宣教旅行中にしたパウロの説教が、使徒言行録13章の中に記録されている。パウロの説教の対象は、小アジアのあるユダヤ教会堂に集うディアスポラのユダヤ人たちとイスラエルの神を信じる異邦人たちだった。パウロの説教の目的も主の福音伝道。その説教の切り口（糸口）は、ステファノの説教に似て、神がイスラエルの先祖（族長）を選び出されるところから。しかし、「アブラハム・イサク・ヤコブ」の名を出して語り始めない。また、出エジプトの出来事にも「モーセ」の名を記さない。わずか１つか２つの文で、モーセ五書をまとめ上げてしまう。ユダヤ人にとって周知の歴史の出来事だからだろうか。そうではない。パウロは、今聴いている人々の思いを「わたしたちの先祖」であるイスラエルの偉人たちに馳せさせるのではなく、その彼らを選び出し、かつ彼らの度重なる行いを耐え忍び、かえって恵みの救済をもって祝福してくださった神を示したかったからではないか。神こそが、その御腕を高く上げ、憐みと慈しみをもって民を導かれた。それは、紅海が分けられた大いなる奇跡を末代まで伝えることが大事なことではなく、その神の愛と御業は、来たるべきさらに大きな出来事の前触れとしてのしるし、それが出エジプトであったのはないか。それは、主イエス・キリストの福音を指し示さなければ、ただ風化して色褪せていく過去物語に過ぎない。

　主に生きる者なら、この視点を外さない信仰に生かされたいと願う。